令和元年度 二条城まつり

二条城歴史講座［記録］

京都市文化市民局　元離宮二条城事務所

「世界遺産登録 25 周年記念 二条城まつり」の一環として，平成 29 - 30 年度に実施した「二条城歴史調査」の成果を踏まえ，二条城にまつわる歴史の解説講座を開催しました。本冊子はその記録です。

二条城歴史講座　開催概要

令和元年（2019）11 月 10 日（ 日 ）　13：30 〜 15：00

小林丈広 同志社大学教授

「二条城は誰のものか ―明治維新後の歩みをたどって―」

参加者数 46 名

令和元年（2019）11 月 23 日（ 土・祝 ）　13：30 〜 15：00

藤井譲治 京都大学名誉教授

「江戸時代の二条城」

参加者数 52 名

場所：レクチャールーム（大休憩所北側）

入場無料

二条城歴史講座［記録］　目次

二条城は誰のものか ―明治維新後の歩みをたどって―　　小林丈広

はじめに 1

１．幕末維新期の二条城 2

家茂上洛期／徳川慶喜と大政奉還／新政府支配下

２．府庁時代の二条城 3

府庁移転と営繕／陸軍省管轄期／離宮の設置と府庁の再移転

３．離宮時代の二条城 5

移転後の大修理／明治後半期の二条離宮／大正大礼とその後の模索／京都市への下賜

４．恩賜元離宮二条城 7

京都市移管と敗戦／戦後の二条城／まとめとして

江戸時代の二条城　　藤井譲治

はじめに 10

１. 二条城の築造 10

２．家康・秀忠と二条城 12

家康と二条城／秀忠と二条城

３．寛永３年の後水尾天皇の二条城行幸 13

二条城拡張の主

４．将軍上洛がなくなってからの二条城 16

寛永 12 年 5 月 23 日　二条城の在番体制／京都の町や村と二条城

５. 二条城と災害 17

おわりに 17

二条城は誰のものか
―明治維新後の歩みをたどって―

同志社大学文学部 教授
小林 丈広

はじめに

先日、沖縄の首里城の、正殿をはじめとする7棟が火災で全焼してしまいました。これから何十年かかるかわかりませんが、国が修復再建に尽くすとコメントしていますので、かつてのような姿に復元されるのではないかと思います。日本人にはお城好きの方が多くて一般にも関心は高いので、3年前の熊本地震のときに熊本城の受けた被害も、大きくマスコミに取り上げられました。古文書等を扱う仕事をしている私は、城だけでなく民家など他の被災箇所も気になるところですが、一般の方の関心は特に城に対して向かうことが多いようですね。

昭和初期に国宝に指定された名古屋城も、太平洋戦争の空襲で焼失し、1959年（昭和34）にコンクリート造で再建されましたが、60年が経過し、老朽化に伴う全体整備計画を機に、木造復元の意向も伝えられています。こういった市民の城に対する関心を、二条城においても施設整備に結びつけることができればいいのではないかと漠然と考えていたところ、3年前に、二条城がどういう歩みをしてきたのか、きちんとした歴史調査をしてほしいという依頼が京都市からありました。私自身は明治維新以降の、日本の近現代史を専門に扱っています。どういう内容の調査をすればいいかを事務局に聞くと、江戸時代までの二条城については多くの史料によりおおまかな流れはわかっているが、近現代については基本的なことすらわかっていないことが多く、それを調査してほしいということだったので、お役に立つことができればとお引き受けしました。

城は、市民の関心は高いものの、現在では実用の役に立っているわけではありません。同じような名所でも寺や神社は現在でも信仰する人が参詣に訪れている可能性がありますが、城は実用的な使われ方は一切されていません。それでは何のために保存するのか、ということが大事になってきます。そこで、城が実用の役に立たなくなった明治維新以後の歴史をひもとき、城が何に使われ、何のために保存されてきたかを検証することが、この2年間の調査のポイントだったと思います。

今回の講演のタイトルは、「二条城は誰のものか」です。江戸時代であれば、二条城は幕府のものであったといえるかもしれませんが、現代社会に生きる私たちにとって、二条

城が誰のものかを考えることは、城の存在意義を考えるための重要なテーマといえるでしょう。城は全国各地にたくさんありますが、このことは、どこにおいても課題になっていると思います。今回の歴史調査はその手がかりになると考えましたし、この講演もそれに沿ってお話ししたいと思います。

ところで、たとえば熊本城であれば、江戸時代には熊本藩主の居城であり、政治や儀式を行う場として使われていたと思います。実用性も明確だったわけですが、それに対して、二条城は江戸時代にすでにどの程度使われていたかはっきりしないところがありました。江戸幕府の城ではありますが、普段はさほど使われていなかったのではないかと考えられています。京都の庶民にとっても、二条城は親しみがわく身近な施設というわけではありませんでした。二条城は、熊本にとっての熊本城、姫路にとっての姫路城、彦根にとっての彦根城などのように、その都市のシンボルとはいいにくい、存在感の薄い施設だったのではないかと思います。江戸時代の二条城は幕府の出先機関で、武家町もほとんど存在しませんでした。江戸時代の頃から、何のための施設なのかは幕府にとっても課題だったのではないかと思います。

さて、そんな二条城が政治の場として復活しました。それが幕末維新期です。政治が激動するなか、なんとか幕府に対する批判を抑えるために、あるいは薩摩や長州のような勢力が台頭してくるのを抑えるためにも、14代将軍の徳川家茂が上洛して京都に滞在し、たとえ一時的にせよ政治を行います。その場が二条城でした。

１．幕末維新期の二条城

家茂上洛期

家茂が上洛したのは文久３年（1863）の春でした。その後、大坂へ行ったり江戸に戻るなど政治に翻弄されつつ、慶応元年（1865）閏うるう５月まで３度にわたって京都に上洛したといわれています。幕末の二条城を描いた絵図は私の知る限りそれほど多くはありませんが、そのうちの一つが、池坊が所蔵する二の丸御殿を描いた古文書です［御代替御礼住職継目御礼記録（元治元年〔1864〕五月朔日、池坊専正）］。これは、当時の池坊家元が代替わりに伴う挨拶をするために将軍家茂を訪ねたときのものですが、その際に池坊家元が二の丸御殿のなかの様子とそのときの一連の行事を書き留めたものです。このなかに、「池坊」の文字もみえます。一般の町人ではなく、池坊家元のように何らかの由緒を持つ者が将軍に謁見したいと申し出て、ずらりと並んで着座していたのでしょう。そして黒書院の上段の間に将軍が現れるわけです。この文書には、入口を入って蘇鉄の間を通り、黒書院にどんなふうにたどり着いたかも記されています。

吉田松陰のアメリカ密航に関与したとして松代（長野）で蟄居させられていた佐久間象山が、家茂に呼び寄せられて上洛し（象山の登用は、慶喜の進言による）、献策したのもこのときといわれています。このように政治の場、儀式の場として二条城が使われたのも幕末という時代だったからであり、ふだん江戸に将軍がいる間は、このような形で二条城が使われることはありませんでした。

池坊には大きな地図も残されていて、字が薄いので読みづらいのですが、「御黒書院御上段」といった文字も記されています。さきほどの文書が詳しく描いていたのは、まさにこの場所です。池坊家元らは「溜之間」にずらっと座って拝謁したのですね。

このように、京都のまちなかには、二条城を訪ねて将軍と謁見をしたという方々がおられるので、こうした史料調査を進めていけば、当時の二条城の様子もまだまだわかってくることと思います。

徳川慶喜と大政奉還

家茂は、この謁見の1年後、慶応2年（1866）7月に亡くなります。その跡を継いで慶喜が同年12月に第15代将軍に就任します。慶喜は、朝廷との連携を重視してずっと京都・大坂に滞在していたので（鳥羽伏見の戦いに敗れるまで）、家茂と違い、しばしば二条城を訪れています。二条城を最も有名にしたのは、慶応3年（1867）10月の大政奉還の場面ですね。諸侯を集めた謁見が行われたのが大広間。上段の間に将軍がお出ましになり、在京の十万石以上の大名を招集して大政奉還の諮問が行われ、これを参考にして将軍は大政奉還と将軍職の返還を行なうと告げます。慶喜は、大政奉還によって政治体制の再編、そして列侯会議を主導する形での徳川政権存続をねらったわけですが、大政奉還後の政治体制は諸侯会議によって決められるはずなのに、倒幕派の人々によって覆されてしまい、その年の12月には慶喜をはじめとする幕府の面々は京都を逐われることになります。代わって二条城に入ってくるのは新政府軍です。

新政府支配下

もと家茂の補佐役でもあり、長州征伐の総督になったこともある徳川慶勝（尾張藩藩主）は時代の流れを読み、薩長側に付いて大きな役割を果たしていくことになるのですが、慶応4年（明治元年（1868））1月5日に二条城を収管します。そして1月27日には、城内に新政府の中枢機関（立法・行政・司法の三権を統括する）＝太政官代が設置されます。ついで、学習院や金穀出納所、会計事務裁判所なども設置されました。

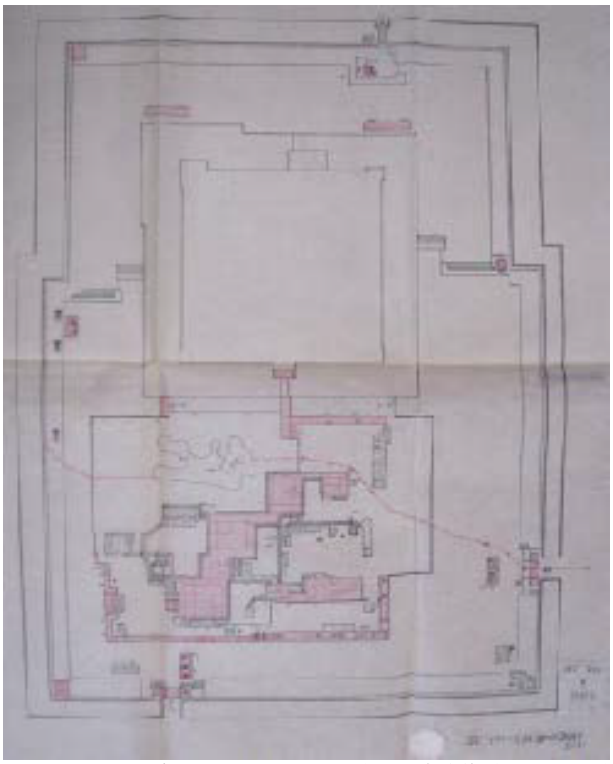
その年は、新政府が二条城を押さえてから4か月後の閏（うるう）4月に、仮皇居を二条城本丸、太政官代を同二の丸に造営する計画があった、と記録には残っています。これは実際には行われず、4月21日に太政官代のほうが御所に移転されます。つまり二条城は、文久3年から5年間ほどは注目を集めますが、太政官代が御所に移ることによって中央の政治の舞台からまた離れていくのです。これは二条城だけの話ではありません。幕末には条約の勅許、外交の問題、長州征伐の問題など国の重要な事柄が京都で決められており、京都の町が実質的な首都でした。それが、明治2年（1869）に天皇が東京に移り、引き続いて実質的な東京遷都が行われると、京都も中央の政治の舞台から遠ざかっていくのです。その時期、二条城は誰が使っていたのでしょうか。天皇が東京に移ってしまったので、その留守を預かる留守官という役所でした。ただし、この役所もすぐに廃止されてしまい、明治4年（1871）3月には京都府の管轄になって、京都府の一役所になります。つまり、明治4年のはじめ頃までは、新政府は二条城の旧幕府勢力を追い払いそこを拠点にすることも考えていたようですが、最終的には天皇が入ることもなく、留守官を経て、最後は京都府に移管され、徐々に国の施設としての役割を終えるのです。

２．府庁時代の二条城

府庁移転と営繕

京都府が所管していた時代の文書で「二条城府庁建物1/1200」（明治4年（1871））という絵図が残っています［図1］。二の丸は現在残っているとおりですが、本丸のほうには何も描かれていません。本丸御殿は天明8年（1788）の天明の大火で焼失したといわれており、二の丸御殿しか存在しなかったのです。

さて、二条城を京都府庁として使わせてほしいと言い出したのは、文書の上では京都府の側だったとなっています。京都府という役所は江戸時代にはなかったので、府ができたときに執務を行う場所が必要でした。都道府県庁のために城を使うということは、全国どこでも思いつきやすいことだったわけですが、明治4年2月に京都府が二条城への府庁移転



［図 1］明治 4-6 年（1871-1873）「二條城府廳建物千二百分一図」
（北が右）　（宮内庁宮内公文書館蔵）

を弁官に申請しています。それを受けて、3月に二条城が京都府管轄になりました。実際には6月に、元京都守護職の上屋敷[1]から二条城に移転してきます。二条城は、家茂の上洛時には増築をして、それなりの整備もなされましたが、幕末期の混乱のなかであちらこちらがかなり傷んでいました。京都府庁として使うために、明治5年（1872）2月に大蔵大輔井上馨に営繕経費増額を請願しますが、新政府も予算に余裕があるわけではないので、3月には却下されるという経緯がありました。

陸軍省管轄期

この年の2月に、二条城は府庁としての利用を継続しながら、いったん陸軍省管轄になっています。これは京都の側の事情ではありません。廃藩置県（明治4年（1871））を機に、国では全国にある城郭をどう管理していくのかが課題となっていたのです。江戸時代に軍事的意味合いで、あるいは政治の場所として実際に使われていた各地のお城は、その機能を失いました。旧藩主は失職し、東京への移住が命じられ、各県には新たに中央政府から県令が派遣されました。城郭は空き家同然になっていきます。各地に伏在する反政府勢力の拠点になる可能性もありますので、そのまま放置することもできません。お城を整理する作業が政府によって行われます。残す城は「存城」、不要な城は「廃城」と通達され、廃城となった城は整理し、大蔵省の普通財産にするという方針が示されました。これが1873年（明治6）[2]の「廃城令」です。

二条城は「存城」に含まれていたわけです（例えば、淀城は「廃城」でした）。残す城はよほどのことがない限り、陸軍省が管理するのが政府の方針として示されました。当時40城余りが存城となったとはいえ、文化財として保存されるわけではありません。お城には広大な土地があるし、場所によってはまちの中心部にあったり、高台にあったりするので、陸軍がそのまま使ってもよい、というのが新政府の考え方だったのでしょう。

二条城の場合は引き続き京都府が使いたいという意向を持っていましたし、京都のまち全体を見渡せる場所というわけでもなく、国もここを特に軍用地として使う計画はなかったので、そのまま京都府庁として使ってよいということになりました。

その後やや時間は経ちますが、1877年（明治10）には正式に、二の丸御殿を中心とする建物のある場所を京都府として使いたいという申請を行い、使う以上は修繕をして、役所として機能するようにして使いたいというや

(1) 京都の治安維持はもともと京都所司代や京都奉行所が担当していたが、治安が極度に悪化したため文久2年（1862）に設置された。現在の府庁にあった。

(2) 明治5年12月2日（1872年12月31日）をもって太陰太陽暦が廃止され、その翌日からグレゴリオ暦に移行し、明治6年（1873年）1月1日となった。よって本稿でも、明治6年以降は「西暦（和暦）」で示している。

りとりが、陸軍省とありました（無償貸与の契約）。

1879 年（明治 12）8 月に、府が傷みの激しい本丸の返戻を申請し（本丸は天明の大火で焼失したといわれていますが、返戻時には「仮建家」8 棟の存在がうかがえます。おそらく「食堂」「遙拝所」と思われます）、同年 8 月に本丸を除いて再契約し、陸軍省はこのころに綿密な測量を実施しています。

離宮の設置と府庁の再移転

府庁はいま釜座通の北正面にあります。二条城は京都のまちなかでいえば少し西に偏っていますので、もう少し中心部で京都府の行政を行いたいという京都府側の意向がおそらく出てきたのではないかと思います。第 3 代京都府知事・北垣国道の日記（1881 年（明治 14））にはこう記されています。

「二条城はこれまで仮の京都府庁として使ってきたが、府庁を別の場所に移して、二条城を離宮にして永久保存してはどうかという意見を宮内省に申し入れている」と。

同じころ、朝日新聞には「近々全国中に五ケ所の離宮を設けらるゝ由にて、其御場所は京都の二條城、大阪城と今三ケ所の中、越前の敦賀城をも用らるべきかと申す風説あり」という記事が載りました。実際に敦賀城が離宮になることはなかったのですが、天皇が行幸や滞在をするのに都合のいい場所を全国に何か所か定めて、宮内省のものにしていこうという計画が国のほうでも持ち上がっていたのです。北垣もおそらくそういった事情をわかって、申し出たのではないかと思います。この意見が通り、二条城は離宮になります。北垣は府知事であるだけでなく、宮内省の大書記官を兼任していたので、二条城の管理にも関わっていたようです。

1884 年（明治 17）7 月、二条城は「二条離宮」と改称され、正式に宮内省のものになります。一方、府庁は二条城から現在地に移転しました。

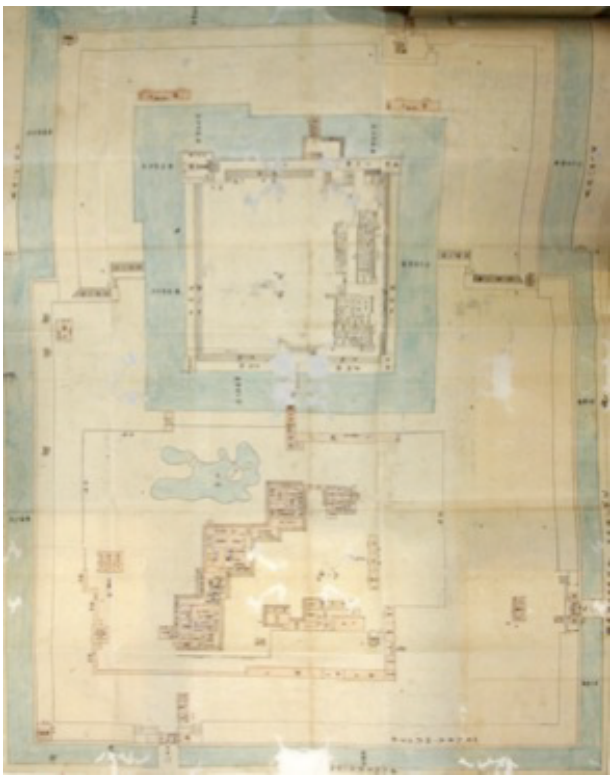
こうして、1971 年（明治 4）から 1884 年（明治 17）までの 14 年間、二条城は京都府庁として使われてきましたが、これ以降は宮内省のものとなります。

３．離宮時代の二条城

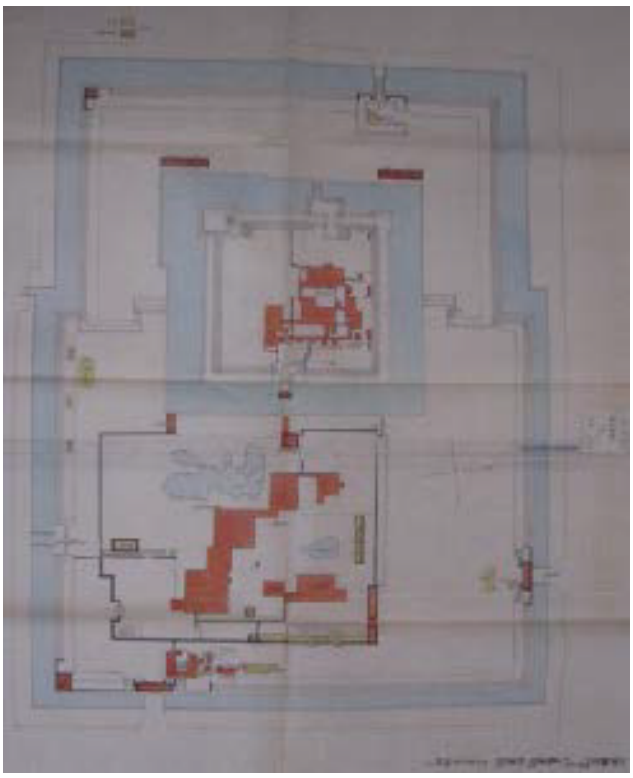
移転後の大修理

京都府は財政も豊かでなく、できたばかりの役所だったので、二条城を微修正しながらやりくりして使っていたのですが、国は「二条離宮」とする以上は本格的に修繕する必要がある、と考えました。もし京都に天皇が行幸する場合には、二条城で何らかの儀式をするかもしれない。そう予想されましたので、1884 年（明治 17）から 86 年（明治 19）にかけて二条城は大規模修繕されます。当時、二条城には建物としては二の丸御殿しかありませんでした。全体を畳敷きにすることも検討されたようですが、実際には板敷きに絨毯張りとなり、唐門屋根は瓦葺きも検討されたようですが檜皮葺きとなります。御殿床下の柱補修工事については、1886 年以降も小修繕が行われます。

このような大修理を経て、二条城は国の迎賓施設と位置づけられ、1887 年（明治 20）1 月に明治天皇、3 月にドイツのレオポルド親王が来城されるなど、頻繁に使われるようになっていきます。



［図 2］明治 12（1879）年「山城国愛宕郡上京区陸軍省二条城郭地坪六万千九百四拾四坪壱合五尺 別紙図面」（北が右）（京都府立京都学・歴彩館蔵）



［図 3］「二條離宮明治 26 年主要建物配置図 大正 8 年 11 月調整」（北が右）（宮内庁宮内公文書館蔵）

明治後半期の二条離宮

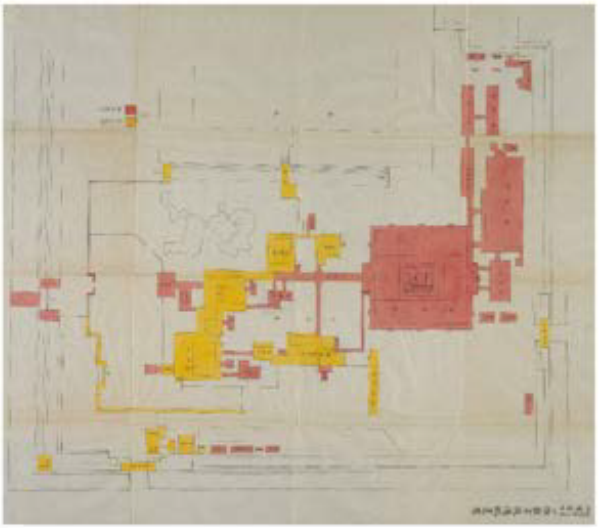
先述したように、二条城の本丸は天明の大火で焼失したので建物は残っていないと考えられてきました。ただ、少し遡りますが、1879 年の二条城の図面を見ると［図 2］、二の丸御殿だけでなく、本丸のほうにもいくつか建物が残っているようです。しかし、このままでは賓客を迎える施設としては不十分と考えられたのか、本丸を本格的に整備しようということになりました。

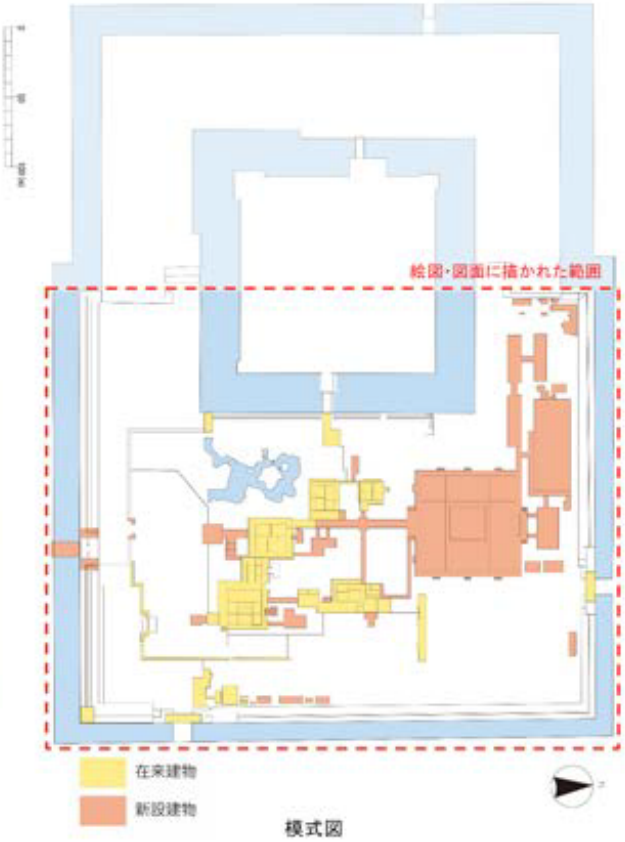
［図 3］は明治後半の主要建物配置図（大正 8 年（1919）調整）です。本丸の御殿として使うために京都御苑にあった桂宮邸を移転します。1893 年（明治 26）から翌年にかけてのことです。同じころ、二の丸御殿内の障壁画・天井画も新調されました。この修復が済んでから、明治天皇が立ち寄ったり（1895 年（明治 28））、皇太子が滞在したり（1898 年（明治 31）と 1900 年（明治 33）の成婚時）ということがありました。

外国の使節もよく二条城を使っていますので、見聞記がいくつも残っています。オーストリア皇太子の日記には次のように書かれています。「殿内のどの部屋も、かつての将軍対面所である大広間に比べれば絢爛さにおいては色あせてしまう。大広間では、黄金色の装飾が文字通り見学者を眩惑させるのである。だが、この大広間の絢爛さにつつまれてはいても、どこか恐ろしさをぬぐいきれないことがあった。大広間には隠し戸があり、その向こうの小部屋（武者隠しの間）に忍んだ将軍警固の者がいつでも飛び出せるように待機しているのでは、とつい思ってしまうからだ。」(3)

これは褒めている例ですが、御殿を絨毯張りにしたのはあまりにもひどい修繕だと酷評した見聞記もありました。西洋の建築物を見慣れている目からすれば、城郭に絨毯張りというのはそぐわないと思う人もたくさんいたようです。いずれにせよ、迎賓施設として頻

(3) フランツ・フェルディナンド『オーストリア皇太子の日本日記 ――明治二十六年夏の記録』安藤勉訳、講談社学術文庫 2005





［図 4］大正 4 年（1915）「二條離宮設備配置図」（北が右）
（宮内庁宮内公文書館蔵）

繁に使われたことがうかがえます。

大正大礼とその後の模索

1915 年（大正 4）、大正天皇の即位に合わせて行われた大正大礼では、この二条城で大規模な宴会が行われました。二の丸御殿に面して大規模な増築がなされ、大饗宴場が設置されたのです［図 4］。二の丸御殿は、途中まで絨毯張りにしてあったのが、全面的に絨毯張りに統一されたということも記録に残っています。この大礼が、近代の二条城で一番盛り上がった出来事だったかもしれません。建て増しされた建物は翌年以降、京都府や京都市に下賜されます。

京都市への下賜

大正大礼が終わって、再度、二の丸御殿の絨毯をどうしたものかという議論があり、1919 年（大正 8）に黒書院・白書院の絨毯が撤去されて薄縁敷込工事がなされ、翌年には二の丸御殿全体が薄縁敷きに統一されます。

一方、1923 年（大正 12）に関東大震災が起こると、全国にいくつもある離宮や御用邸の維持が国庫の負担になっているとして、整理して減らせないかという議論が起こってきます。1927 年（昭和 2）には「離宮御用邸ノ処分」が作成され、全国の離宮のうちいくつかを整理することが決まりました。そのなかに二条城も含まれていました。

4．恩賜元離宮二条城

京都市移管と敗戦

二条城は、1939 年（昭和 14）7 月に世伝御料（旧皇室典範上の皇室の世襲財産）から解除され、同年 10 月には「自今二条離宮ハ之ヲ廃止ス」と通達され、京都市に下賜されました。

このとき二条城は国宝に指定され、以後は文化財として扱われるようになります。宮内省の施設であれば、文化財であろうがなかろうが国が整備しますが、京都市が自分のものだとして自由に改変するということにならないよう、規制する必要があったわけです。二条城という建物を国宝にし、敷地を史跡、庭

園を名勝にする、という措置を講じて、今までの二条城のあり方を引き継いでいくことを条件に、京都市が所有していくことになりました。

そうなると、むしろ多くの市民が見学できるようにすればよい、というのが京都市側の受け止めだったのではないでしょうか。翌年から二の丸御殿と庭園の一般公開が始まります。「恩賜元離宮二条城ハ、国民精神ノ涵養竝ニ歴史上・美術上ノ参考ニ資スル為、一般公開ニ拝観セシムルモノトス」。さらに4年後の1944年（昭和19）には、旧桂宮邸を移築した本丸御殿（玄関、御書院、御常御殿、御台所、雁ノ間等）も国宝に指定されています。

戦後の二条城

このような戦前からの動きを引き継いで、戦後も二条城は、市民のための施設として使われています。広場を野球、運動会のために開放したり、テニスコートが作られたり、あるいはメーデーなどさまざまな催しの会場に使われたりしています。「日本桜草展」「京都菊花展」「山草展」「菖蒲展」「京都文華展」なども開催されてきました。

自治体が持っているお城というのはたくさんあります。どこも維持管理には苦労していると思いますが、自治体が持つことの意味、市民の施設という位置づけは重要だと思います。

まとめとして

幕末維新期は、江戸時代にはなかなか十分には活用されなかった二条城が、再び政治の舞台として注目されたという非常に珍しい時期でした。そもそも京都が政治の舞台になったこととリンクしているわけですが、運が悪ければ戦場になり、お城が焼失してしまってもおかしくありませんでした。しかし、運よく残ることができました。

幕末の激動を乗り切った二の丸御殿を中心に、まずは新政府軍が政府の役所として使います。しかし、まもなく新政府軍は立ち退いて、京都府の施設になり、京都府庁として使われるのですが、それも14年間でした。1884年からは宮内省の施設、離宮として使われます。ここからは明確に国の施設という位置づけがなされます。大正大礼の時などは大整備がなされます。

このような国の施設になったお城は、それほど多くはありません。特に迎賓施設として使われるようになったものは少ないので、きれいに整備されて残ることになりました。だからこそ、民間に一部を払い下げるとか、城内に神社を創建するというような使われ方も避けられました。一方、1939年からは市民のための公共空間になりました。

時期はずれますが、現在、国立である京都国立博物館も、京都市のものだった時期があります。設立は国でしたが、博物館を維持していくのはなかなか難しく、1924年（大正13）に皇太子の成婚を記念して京都市に下賜されていました。しかし、京都市のほうも博物館を維持するのは財政的に困難となり、戦後、国に返還します。二条城の場合とは逆なのですが、こういった文化施設の所有が変わるということは近現代には頻繁に起こっていました。使われ方も変わっていきます。現在の二条城は京都市所有なので、その使い方は京都市が、そして市民が考えていけばよいことですから、この歴史を生かして、うまく活用され保存されればいいと考えます。

以上が、2年間にわたり調査してきた近現代における二条城の姿です。意外に変化が激しかったことがおわかりいただけたのではないかと思います。ご静聴いただき、ありがとうございました。

（令和元年〔2019〕11月10日）

小林 丈弘／こばやし たけひろ ● 静岡市生まれ。日本近現代史・地域史。京都市歴史資料館歴史調査員などを経て、同志社大学文学部教授。主な著書に、『明治維新と京都――公家社会の解体』（臨川書店 1998 年）、『叢書 京都の史料 3 京都町式目集成』（京都市歴史資料館 1999 年）、『近代日本と公衆衛生』（雄山閣出版 2001 年）、『都市下層の社会史』（編著 解放出版社 2003 年）、『京都における歴史学の誕生――日本史研究の創造者たち』（編著 ミネルヴァ書房 2014 年）、『明治維新と思想・社会』（編著 有志舎 2016 年）など。

江戸時代の二条城

京都大学名誉教授
藤井 譲治

はじめに

京都市では平成29・30年の2年にわたって、二条城歴史調査が行われ、私は近世を担当しました。収集した史料を十分に検討し、お見せできる形にするにはまだまだいろいろな点で課題がありますが、調査の一端をみなさまにご紹介したいと思います。

1. 二条城の築造

二条城が計画されるのは、大坂冬の陣・夏の陣よりずっと前、関ヶ原の戦いで家康らの東軍が勝利した翌年のことです。慶長6年(1601)に家康は京都屋敷として築造を始めます。城ではなく、京都屋敷だったのです。

醍醐寺の義演というお坊さんのつけた日記「義演准后日記」の慶長6年5月9日の条にはこうあります。「伝聞、京都ニ内府屋形立云々、町屋四・五千間モノクト云々」。内府というのは、このときに内大臣だった家康のことですが、その「屋形」を立てるために町屋の4～5,000軒が立ち退かされたと書かれています。

また、山科言経という公家さんの日記「言経卿記」の慶長6年5月13日の条には「内府京都屋敷三条柳ノ水辺三町四方云々、御出了、御覧也云々」、つまり、家康の「京都屋敷」は三町四方というわさがあると書かれています(一町は約109 m)。

このあと、家康の京都屋敷は、どういう経過をたどっていつ完成するのでしょう。

慶長7年(1602)4月に、加藤清正ら諸大名に堀・石垣等の普請が命じられます。こういうときには多数の大名が動員されて、石垣や堀を築造します。ましてや、大きな事柄であれば、大名の側に記録が残されているものなのですが、残念ながら規模の問題なのか、二条城についてはほとんど関係史料がありません。ただし、加藤清正に関わる史料(清正の重臣であった下川又左衛門家に伝来する「下川文書」)のなかに次のような形で出てきます。「二条堀川西神泉苑北囲方四町之地」これが最初に築造された、ほぼ正方形の二条城の姿です。(今の二条城は400 m×500 mほどで、これはのちに拡張されたからです。)

こういった史料は探せばおそらくもっと出てくるはずです。慶長7年11月、幕府は北野天満宮の社家に対して、二条城屋敷の庭の松10本を植えるための人足と壁の下地作りを命じます。同様に、ほかの寺社や町にも賦課されたと思うのですが、そういう形で造立さ

［図 1］洛中洛外図（勝興寺蔵）左隻（部分）

れたということもわかります。

完成した二条城に家康が初めて入るのは、翌年の慶長 8 年（1603）3 月です。これに関する記事はそれほど多くなく、当時の二条城がどういうものだったかは意外によくわかっていません。平面図、立面図もありません。ただ、みなさんもよくご存じの通り、室町時代の中ごろ 16 世紀から江戸時代にかけて、洛中洛外図がたくさん制作されるわけですが、その中の一つに二条城が描かれています［図 1］[1]。

二条城完成のころの洛中洛外図は、右隻に内裏と方広寺の大仏殿を描き、左隻に二条城を描くという形が一つの典型的な描き方です。手前に堀川があり、二条城の堀と堀川の間に広場が展開されていますが、おそらく今より広い空間だったと思います。橋を渡って二条城に入るわけですが、右側の隅に天守が描かれていますね。西北の隅に築造されたという記録もあります。慶長 8 年に家康が入った時点ではまだありませんので、おそらく慶長 10 年（1605）か 11 年（1606）ごろに完成するのでしょう。二条城の右側にある大きな屋敷は京都所司代の屋敷です。

慶長期の建物は、記録には「前殿」「南殿」「奥之御座間」「奥之御対面所」「大広間」「泉水御座敷」「玄関」「長屋」という名前が出てきます。今の二之丸御殿にある座敷が直接どれに当たるのかは、なかなか難しいのですが、ある程度の建物がこの段階にはもうあったと考えられます。

慶長 16 年（1611）3 月に豊臣秀頼が上洛して、家康に対面したのは「御成の間」です。家康に対する秀頼の礼という、両者の上下関係が目に見える形でなされました。ただし、家康は、秀頼とは自分と対等の礼で会うと主張をしているので、対面の形だったと思われます。二条城にとってこの御成の間は重要な役割を果たした場所ということになりますが、現存

(1) 紙本金地著色、縦 155.5cm、横 348.4cm、17 世紀初め重要文化財（平成 6 年指定）。本屏風は、百双以上知られる洛中洛外図屏風の中でも、町田家本（国立歴史民俗博物館蔵）、上杉家本（米沢市博物館蔵）などに次いで制作年代が 6 番目に古く、特に二条城が描かれた一双屏風としては最も古い。

の建物との関係はわかっていません。

2. 家康・秀忠と二条城

家康と二条城

慶長5年（1600）の関ヶ原の戦いのあと、家康は、江戸とともに伏見城を拠点とします。

前年から慶長8年10月までは、家康は伏見城にいました。そして、3月から4月までと、7月3日から15日までの間、二条城に入ります。これは、慶長8年2月に家康が将軍宣下を受け、そのお礼のための参内が3月25日だったからです。将軍宣下を受けたのは、二条城ではなく伏見城です。家康の上方における本拠は、あくまでも伏見城なのです。

翌年慶長9年（1604）には、1月に伏見に入り、閏（うるう）8月14日まで約8か月間京都にいるのですが、その間に二条城に滞在したのは6月10日から7月1日までです。ちょうど真ん中ごろの6月22日に参内をしています。参内をするために出向いてきたことが、ここからもうかがえます。

慶長10年も同様で、半年あまりを伏見城で過ごすのですが、4月8日～15日、7月18日～8月22日に二条城にやってきて、4月10日に参内します。家康は将軍を辞し、将軍職を秀忠に譲り、4月16日に秀忠は将軍宣下を受けます。このとき、秀忠が二条城にいる間は、家康は伏見城に行くという微妙な動き方をしていますが、しかし、基本的な拠点が伏見城であることに変わりありません。

慶長11年も4月6日から9月21日までを伏見城で、その間7月27日から8月12日までを二条城で過ごしています。4月28日に参内しています。家康は参内するとき必ず二条城に入ったのかというとそうではなくて、伏見城からやってきて伏見城に帰るときもあったことがわかります。この時期の二条城の機能というのは、かなり限定的に考える必要があると思います。

慶長12年（1607）から15年（1610）は、家康は上洛をしません。自らの拠点を伏見城から駿府城に移したからです。伏見城であれ、二条城であれ、それ以降は拠点として使われることはありませんでした。

慶長16年の上洛は、先述したように豊臣秀頼との対面という大きな意味もあるのですが、それが主たる目的ではなく、後陽成天皇の譲位、後水尾天皇の即位を取り仕切るための上洛でした。二条城に入り、3月23日に参内しています。

慶長17年（1612）、18年（1613）は上洛していません。

慶長19年（1614）、20年（7月に改元されて元和になる）（1615）は大坂の陣のための上洛です。10月23日に家康は二条城に入り、秀忠は伏見城に入ります。伏見城はこの段階では秀忠の城として機能しているわけです。慶長20年も同様で、4月18日から8月4日まで家康は二条城に入りますが、秀忠は伏見城に入ります。

こういった形で城の使い分けをしていたわけですね。慶長11年までは、少なくとも上方における拠点は伏見城でしたし、二条城は京都での儀礼、特に参内と絡んで機能していた、ということができます。

［表1］家康の上方滞在と二条城（慶長8年から元和元年まで）

年	伏見城	二条城	備考
慶長8年	～10/18	3/21～4/16　7/3～15	2/12 将軍宣下　3/25 参内
9年	1/29～閏8/14	6/10～7/1	6/22 参内
10年	2/19～9/15	4/8～15　7/18～8/22	4/10 参内　4/16 秀忠将軍宣下
			伏見 2/19～5/15、二条城 4/17～27
11年	4/6～9/21	7/27～8/12	4/18 参内　8/11 参内
12～15年	上洛せず		
16年		3/17～4/18	3/23 参内
17・18年	上洛せず		
19年		10/23～	秀忠伏見　大坂冬の陣　12/28 参内
20年		～1/3　4/18～8/4	秀忠伏見　大坂夏の陣　6/15 参内
元和2年	上洛せず		4/17 駿府で死去

秀忠と二条城

家康が生きている間は、二条城は明らかに家康の城だったのです。上方における拠点とは言えないまでも、とにかく家康の城でした。では、秀忠と二条城の関係はどうだったのでしょうか。元和2年（1616）4月に家康は75歳で生涯を閉じ、それ以降は、秀忠単独の時代になります。元和9年（1623）に家光に将軍職を譲るまでの7年間ですね。

家康が亡くなってから最初に上洛したのは元和3年（1617）であり、大坂夏の陣から2年後ですが、6月29日に伏見城にやってきます。7月21日に参内するのですが、二条城には入りません。伏見城からやってきて、そのまま伏見城に戻るわけです。

元和5年（1619）5月27日に二度目の上洛をし、7月25日に参内します。そのときも二条城には入らず、伏見城から直接参内をして、伏見城に戻っています。9月18日に伏見城を出発して、一時、二条城に立ち寄りますが、その日のうちに京都を発っています。どうやら秀忠は、家康の作ったものを避けていたのか、二条城が嫌いだったように思えます。まったく使っていなかったというのが面白い事実ですね。

元和6年（1620）に、秀忠の娘の和子（まさこ）（のちの東福門院）の入内（じゅだい）があります。入内の行列の出発点として二条城が使われますが、秀忠自身はそのとき京都に来ません。

元和9年(1623)には家光の将軍宣下のため、秀忠と家光が上洛します。秀忠は、二条城に6月8日から7月6日までの約1か月、大坂には7月6日から13日までいて、再び二条城に戻ってきて、閏8月には江戸に下ります。

一方、家光にとってはこのときが初めての上洛です。秀忠にひと月遅れて、家光は7月13日に上洛し、伏見城に入ります。そして、7月27日に伏見城で将軍宣下を受けます。秀忠は二条城が嫌いだったにせよ、この秀忠・家光の関係は、秀忠の将軍宣下のときの家康・秀忠と同じ構図です。そして上洛している間、家光は二条城（つまり秀忠のもと）に10回やってきます(8月6日には御礼の参内)が、日帰りで伏見に戻ります。

この上洛の時に秀忠は将軍職を家光に譲って、三代将軍徳川家光が成立するわけですが、以上のようなことから、二条城が家光の城であるとはとても思えません。秀忠は二条城をあまり使わなかったのは事実ですが、城の主は秀忠だったと言ってよいでしょう。

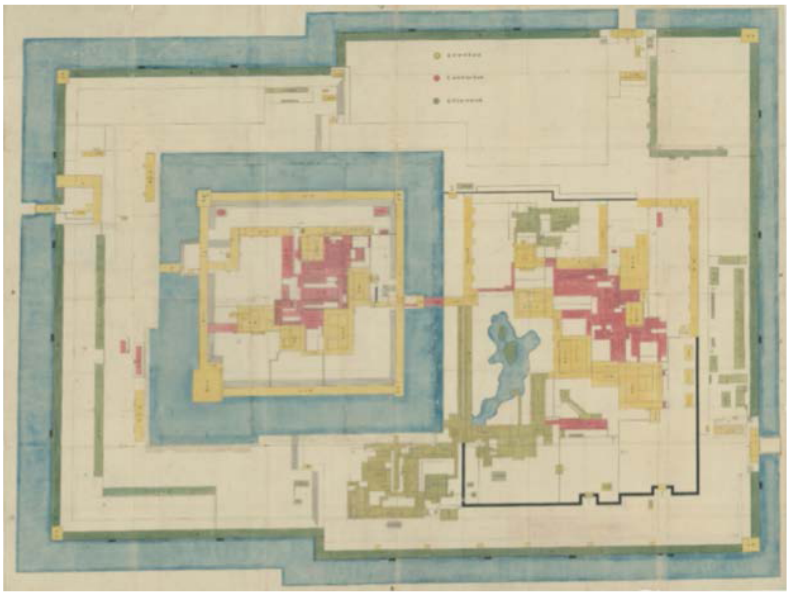
3. 寛永三年の後水尾天皇の二条城行幸

二条城拡張の主

寛永3年（1626）9月6日、後水尾天皇が二条城に行幸しました。この行幸は、幕府のゆるぎない威光をひろく世間に知らしめることになります。

行幸にあたって、二条城は西方に大きく拡張されます。拡張工事が開始されるのは寛永元年（1624）のことです［図2］。右側が家康の作った二条城。左側の、少し狭めて出っ張るように作られたのが寛永のときに拡張された部分です。本丸が設けられ、本丸の周りに濠が掘られて、もとあった天守は壊され、本丸の内堀の中、南西の隅に新たな天守が作られました。普請は家康の時とは異なり、徳川一門、譜代大名を中心として行なわれます。このときの図面は残っており、誰がどこの石垣を積んだかということが詳細にわかります（家康時代のもあればよいのですが、残念ながらそれはありません。）そして、本丸を設けただけではなく、後水尾天皇の行幸のための御殿を、二之丸の南側の空間に建設します。その様子を描いた洛中洛外図は手前に堀川があって、堀川の広場、外濠があり、櫓が両端にあってさらに奥へいくと天守閣がそびえるという構図で描かれています［図3］。二条城の姿は大きく変貌しました。

では誰が、この二条城の拡張をやったのでしょうか。多くのガイドブックには、二条城は家康が作り、三代将軍家光の時に完成した、と書いてあり、家光が完成させたという筋書



［図2］寛永3年（1626）以降「二条御城中絵図」（京都大学附属図書館蔵）
ただし、この図が作成されたのは天保14年。寛永3年の後陽成天皇の二条行幸時の建物と寛永11年以降在番制が実施される以前に取り壊し（候補）となった建物が示されている。

［図3］洛中洛外図屏風（佛教大学附属図書館蔵）左隻（部分）

きがずっと定着していました。しかし本当は、それは誤りです。

私がそれを主張する理由を挙げましょう。

寛永元年（1624）10月4日付け中井大和正侶[2]宛ての江戸幕府西之丸年寄の連署奉書には次のように書かれています（『大工頭中井家文書』）。江戸城において西之丸は、寛永元年には秀忠が住んでいるところで、本丸には家光が移っています。内容は「書状之趣令披見候、二条御殿御差図被差上候、則到来候、京大坂御作事不被存油断之通尤之儀候、弥可被入精候、恐々謹言」とあり、この年寄連署奉書の作成者は秀忠付の西丸年寄二人であり、この指示は秀忠の意向が示されたものであって、家光ではありません。「書状之趣令披見候（しょじょうのおもむきひけんせしめそうろう）」つまり、中井正侶から来た手紙を、西丸年寄であった永井信濃守尚政（のち山城淀藩10万石）と井上主計頭正就（横須賀藩初代藩主。母が徳川秀忠の乳母であったため、早くから秀忠に近侍）が受け取ったこと、そして、中井から差し上げられた「二条御殿御差図」が、秀忠付の二人のもとに届いたということですから、二条城は秀忠の裁量で行われたのだろうという推測が成り立ちます。

もう一つの史料は、寛永2年（1625）6月29日付け中井大和正侶宛ての京都所司代・板倉重宗書状です（『大工頭中井家文書』）。この書状の「猶々書き」（「猶々」の語で書き始めるところからいう。追伸のこと）に「二丸御座之間北之方ニ　将軍様御座間小キ御殿壱立申候（ひとつたてもうしそうろう）」つまり、二之丸の御座之間の北側に将軍（家光）のために小さい御殿を建てよ、と書いてあります。家光の城であれば、このような表現はあり得ません。しかも、指示を出すときにこういった言い方ができるのは、秀忠以外にはないのです。

その「小さき御殿」というのは、［図2］に、現在の二之丸御殿の御座の間の北側に座敷が二つ書かれていますね、これだと思います。

(2) 大工頭として徳川家康に仕えた中井正清の長男で、正清の跡を継ぎ、幕府京都大工頭を務めた。

行幸のために作られた御殿は、行幸が終わると翌年にはほとんどが取り壊されて、南禅寺や仙洞御所、公卿の屋敷に運ばれたりしました。家光の御殿もこの時、姿を消したようです。

さて、寛永3年（1626）は、秀忠は二条城に6月20日から10月6日まで、結構長期間滞在します。それに対して、家光は8月2日から9月25日まで（二条行幸のあった期間を含む）の滞在となります。行幸は9月6日から10日までです。行幸した後水尾天皇は、秀忠を太政大臣に、家光を左大臣に昇進させます。つまり、官職の上でも秀忠のほうが家光よりも上位であることには変わりません。

お祝いの儀礼は、「於二条本丸、大相国（秀忠）御昇進之後祝儀、公卿・殿上人及武家諸大名五千石以上献太刀目録、[各装束]、同日、於二丸、将軍家（家光）御昇進之御祝儀、右面々謹礼同前、」(『紀年録』寛永3年9月15日条)とあります。本丸は間違いなく、秀忠の居所ということになります。

家光は8月2日、京都に着いて二条城に入りますが、秀忠に挨拶して、その日のうちに淀城に行きます。伏見城は壊されて、このときはもう存在していません[(3)]。伏見城の天守は、二条城の本丸に移したと言われていますし、また、二条城にあったものを淀城に移したとも言われていますが、確たる証拠はありません。

それはともかく、淀城が三代将軍家光の居所でした。8月2日から2週間ほどして、家光は淀城から二条城に入り、18日に参内をして淀城に戻ります。その後はどこにいたか正確にはわかりませんが、9月6日には後水尾天皇を迎えるため禁裏に出向いているので、少し前には二条城に入ったのではないかと思われます9月10日に行幸が終わり、天皇は禁裏に戻りますが、13日に家光は秀忠とともに参内します。そして、先述したように、9月15日には家光の左大臣任官、秀忠の太政大臣任官の儀礼が二条城で行われます。16日に大坂へ行き、17日には二条城に入ります。19日には母親の大御台所（お江の方）が江戸城にて死去したとの報が京都に届いたので京都出発を延期し、結局25日に出発します。

以上から、父親である秀忠が二条城にどんと腰を据えていて、その秀忠のもとに家光がやってくるという構図を読み取ることができます。秀忠は寛永9年（1632）に亡くなり、家光は2年後に上洛します。この時は大坂に一時行きますが、基本的には二条城を拠点にしています。この段階での二条城の主は家光ということになります。ただし、寛永11年（1634）のこの上洛を最後に、幕末の文久3年（1863）――維新まであと4、5年という時期――まで200年余りの長きにわたって、将軍の上洛はありません。そういう意味で、主人たる将軍が二条城にいない状況が続くという

[表2] 寛永3年（1626）の家光の居所と行動

7月12日	上洛のため江戸発。
8月2日	京都着、二条城に入る。その日のうちに淀城に行く。
8月14日	夜、淀城から二条城に入る。
8月18日	参内。その後淀城へ戻る。
	（この間、正確な居所不明）
9月6日	後水尾天皇を迎えに禁裏へ。
9月10日	後水尾天皇禁裏へ戻る。
9月13日	秀忠とともに参内。
9月15日	左大臣任官の祝が二条城二之丸で行われる。秀忠の太政大臣任官の祝いは本丸。
9月16日	大坂へ。
9月17日	大坂より二条城へ。
9月19日	京都発の予定が、「大御台様（お江）」の死去の報を受けて延期。
9月25日	京都発。
10月9日	江戸着。

(3) 大坂の陣後、しばらくは二条城は将軍参内時の宿舎、伏見城は居館用として利用され続けていたが、元和5年（1619）には伏見城の廃城が決まり、翌年から城割りが始まった。元和9年（1623）7月16日、家光の将軍宣下の際には、「先年破壊残りの殿閣にいささか修飾して御座となす」(『徳川実紀』)とあり、本丸部分に若干の修復をし将軍宣下が執り行われた。その後完全な廃城となった。

ことになります。

寛永3年の行幸のために作られた施設のうち、唐門は南禅寺の金地院崇伝へ下賜されます（寛永4年）。行幸御殿と中宮御殿、および行幸御殿と二之丸御殿をつないでいた御次の間などは仙洞御所に移築されています（寛永5年）。

4．将軍上洛がなくなってからの二条城

寛永12年5月23日　二条城の在番体制

将軍上洛がなくなってからの二条城はどういう状況だったのでしょうか。それについては、今後、京都の市中に分散している史料をもっと丁寧に調べないと十分なことはわからないのですが、現時点でわかっていることをご紹介しておきましょう。

家光が上洛した翌年（寛永12年〔1635〕）に、二条城の在番の体制ができました。幕府には常備兵力として大番という部隊が10組あったのですが、二条城にはそのうちの2組が1年交代で勤めました（毎年4月に交代）。その構成は、大番頭が2人、組頭4人、番衆100人（2組の合計）でした。任務は、城の警衛はもちろんのこと、城の修理、城に備える米や鉄砲の管理です。鉄砲奉行や破損奉行は在番衆から選定され、蔵奉行のうちの1人も在番衆が担いました。また天明の大火後には、御所造営の際の周辺警備や御所への使者を勤めたこともわかっています。

二条城の門番は、東西の門の櫓や番所を管轄しました。門番自身は城の中には住まず、外に家を持っていました。（二条城には東門、西門のほかに北門もありますが、北門だけは門番の管轄ではなく、京都所司代の管轄でした。）

鉄砲奉行は、四隅の櫓、櫓跡と焔硝蔵を管轄しており、外に家を持っていました。破損奉行は城内東西の番衆小屋にいました。1人だけ三輪市十郎と、史料に名前で出てくる人物がいますが、これは世襲で代々、二之丸御殿を預かる、つまり、二之丸御殿の管理をしていたということだと思います。

城の外側との関係でもっとも役割の大きいのが蔵奉行です。二之丸の北東の折廻おれまわり米蔵と、西の蔵、本丸の西米蔵2棟の、全部で4棟の米蔵を管理しています。蔵奉行は3人いて、その下に手代、蔵番、小揚といった実務担当者がいました。

これらの蔵にはどのぐらいの米が貯蔵されていたのでしょうか。延宝4年（1676）で1万石、天和元年（1681）で1万7000石という記録があります。これは城詰米[4]と言って、要地の譜代大名の比較的大きな城に、主に兵糧米として詰められるものです。毎年入れ替えるわけですから、毎年1万石の米が処分され、売りに出されます。一部は伝奏・議奏[5]などの公卿や、所司代、町奉行、禁裏付きの与力・同心、在番衆に支給されたのですが、大半は町に放出されます。京都の町で1万石というのは絶対量ではけっして多いとは言えないでしょうが、一定量の米が毎年、二条城を通って動いていたということになります。京都市中との重要な関係がみられます。

京都の町や村と二条城

今回の調査で明らかになった、二条城と京都の町や村との関係を少し拾い上げてみましょう。

二条城内外の掃除は、当初は三条天部村ほか5か村にその役が課されていたのですが、動員人数は1年で3,700人と言いますから、相当な数です。ただし、宝永5年（1708）以降は所司代調達の人足が担いました。

また、二条城には時太鼓があり、その皮張りは天部村が担当していました。

城の正月の松飾りは稲荷村が担当し、年末

(4) 幕府みずからの貯穀、譜代の諸城に貯えたもの、および幕府直轄地における貯米。これらは幕府の全国支配の一環として軍事上や飢饉対策、米価調節に利用された。

(5) 朝廷における官職。天皇の側近として朝幕間の事務連絡に当たらせ、また重要政務を合議した。親幕的な公卿が多く任じられている。

のすす払い・正月の飾り付けは「御土居内十二ケ村」上鳥羽村ほか12か村が担当しました。

100人の在番衆は城から出ないのかというとそれはなく、非番のときは町人、商人との交流があったので、実際どのようなものだったかについては、今後調べを進めると面白いことがみつかりそうだと思っています。

5.二条城と災害

近年、大雨や火災などさまざまな災害が起こっていますが、江戸時代もけっして平穏だったわけではありません。二条城が被ったと記録に残る災害は［表3］のとおりです。

天明8年（1788）、京都の歴史上最大ともいえる、天明の大火が起こります。［図4］はそのときの二条城の被害状況を表したものです。この図からは、天明8年以前はどういう状態であったかということがわかります。グレー色の部分は、このときに焼けなかったところです。黄色は火災で焼失するのですが、すぐに再建されたところで、オレンジ色は焼失しながら再建されなかったところです。

右の下に雁行して並んでいるグレー色の建物群が現在の二之丸御殿ですね。左下西南のグレー部分は京都の在番衆の屋敷です。先述したように毎年50人の大番衆が2組、この番に詰めて翌年には交代するのですが、これは西の御番衆の屋敷です。北のほうの黄色部分は東御番衆の屋敷で、大火で焼失しますが、のちに再建されます。本丸部分はオレンジ色になっていますね。本丸御殿と周りの回廊はこの大火で焼失したのち、再興されませんでした。二条城の本丸部分は、現在は別の建物になっていますが、その前は更地だったのです。

天守はそれより少し前に落雷で焼け落ちています。

文政13年（1830）の大地震では、大坂目付の被害状況の報告73か条のうち第43条に、二之丸御殿の被害状況が記されています。「御玄関遠侍殿上の間、御式台の間、同裏の間、同大広間、同所溜の間、蘇鉄の間、御黒書院、御座の間、同所東溜、御雪隠、総体傾き、御屋根天井、欄間羽目御張附雨戸壁等迄損申候」今残っている二之丸御殿がこの時に大きく傾き、大きな被害を受けたという記録です。これらはどの段階かで修復されて今の姿があるということになります。

このような災害だけでなく、木造建築物というのは必ず劣化するので、必要な時には修復がなされてはじめて今の形が維持されている、ということも忘れてはなりません。

［表3］二条城と災害

万治3年（1660）	7月6日	大風雨　石垣が破損
寛文2年（1662）	5月1日	大地震　「殿舎」が大破（朽木谷が震源地、被害は近江・若狭を中心に広範囲）
寛文5年（1665）	5月12日	大地震　石垣・二之丸などが破損
元禄14年（1701）	6月20日	落雷　天守の一部などが破損
宝永4年（1707）	10月4日	地震
寛延3年（1750）	8月25日	落雷・火災　天守が焼失（再建はされなかった）
天明8年（1788）	1月30日	天明大火　本丸が焼失。午前5時頃、団栗辻子から出火し、二条城には午後2時頃、東御門や辰巳（南東）櫓へ火が吹き付けるが、町奉行や伏見奉行、篠山藩（火消役）の部隊が防ぎ止める。午後4時頃、戌亥（北西）櫓から火が入り、本丸に燃え移る。二之丸の在番衆の屋敷が過半焼失。（本丸は再建されなかったが、在番衆の屋敷は再建された）
文政2年（1819）	6月12日	地震
文政13年（1830）	7月2日	大地震

おわりに

このあとの幕末における展開をざっとお話して、この講座を締めくくることにしましょう。

文久3年（1863）2月5日――1868年が慶応4年であり明治元年ですから、明治維新の5年前です――14代将軍の家茂が上洛して、二条城に入ります。家光以来の将軍の上洛となります。

慶応3年（1867）10月には15

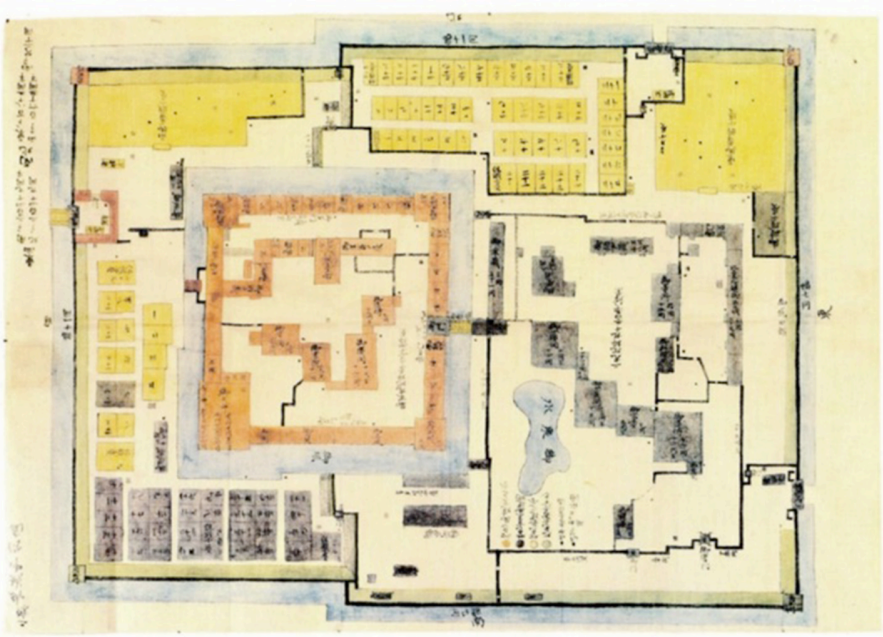
代将軍慶喜が二条城において大政奉還をしますが、政権と将軍職を返上するだけでは事態は収まらず、12月には王政復古のクーデターを受けて、慶喜は二条城を退去します。この時、二条城は徳川の手から離れるのです。翌年の1月27日に新政府の中心的組織となる太政官代が二条城内におかれます。9月8日に改元され、明治元年となります。

ただし、長い間、太政官代がここにあったわけではありません。明治天皇の東京への遷都があり、明治2年（1869）に太政官代も京都から東京に移されました。その結果、明治4年（1871）に二条城は京都府[6]に下げ渡され、ここが京都府庁になります。明治17年（1884）に二条離宮となるまで京都府庁時代が13年続きました。そして、昭和14年（1939）10月に二条離宮が廃止され、京都市に下賜されて現在に至ります。

私たちは二条城と呼んでいますが、国指定の史跡名は「旧二条離宮」、離宮としての指定です。

最後は簡単に触れるだけになりましたが、以上で私の話は終わります。ご静聴いただき、ありがとうございました。

（令和元年〔2019〕11月23日）



［図4］天明8年（1788）「二条御城中絵図」（陽明文庫蔵）
天明大火の焼失状況と非再建建物・再建建物を示したもの。

藤井 譲治／ふじい じょうじ ●福井県生まれ。京都大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。博士（文学）。京都大学大学院文学研究科教授を経て、現在京都大学名誉教授、石川県立歴史博物館館長。
主な著書に『江戸幕府老中制形成過程の研究』（校倉書房1990年）、『人物叢書 徳川家光』（吉川弘文館1997年）、『幕藩領主の権力構造』（岩波書店2002年）、『徳川将軍家領知宛行制の研究』（思文閣出版2008年）、『戦国乱世から太平の世へ』（岩波新書2015年）、『人物叢書 徳川家康』（吉川弘文館2020年）、『江戸時代の官僚制』（法蔵館2023年）など。

(6) 京都府は、明治に改元される前の、慶応4年（1868）6月19日に設けられた。

令和元年度 二条城まつり
二条城歴史講座［記録］

京都市文化市民局　元離宮二条城事務所
〒604-8301　京都市中京区二条通堀川西入二条城町 541
発行　令和 2 年 1 月

協力　（株）シィー・ディー・アイ
〒604-8426 京都市中京区夷川通室町東入巴町 83 番地